

タイトル：コタキナバル・リエゾンオフィス企画による交換講演会 (UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Southeast Asia)

日時：2019 年 3 月 13 日 (水) 14:00-16:25

場所：マレーシア。サバ大学 (UMS) 人文学部

参加者：33 名 (うち外国人 29 名)

内容：

AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO) とマレーシア。サバ大学 (UMS) 人文学部の共催によりコタキナバルの同大学キャンパス内の人文学部で交換講演会 (UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia) が実施された。当日はプログラムに沿って AA 研側から 2 名、UMS から 1 名の研究者が参加して講演を実施した。開会に先立って UMS 人文学部側による Dr. Marsitah Mohd Radzi 学長挨拶 (Jacqueline Pugh-Kitingan 教授が代読)、ならびに KKLO 拠点長の床呂郁哉 (AA 研) からの趣旨説明がなされた。

講演では、まず最初の発表者の吉田ゆか子助教 (AA 研) が "Disabled" Bodies and Humor: Two cases of Balinese comedy theatre と題した研究発表を実施した。その概要は以下の通りである。

本研究は、インドネシアのバリ島において、コメディに参加する、身体に欠損 *impairment* のあるアマチュアの芸能家たちについての考察である。彼らは、他のバリの芸能家と同様、主にヒンドゥ教儀礼において、人間の参拝者やそこに集う神々を楽しませるための上演に参加する。上演中、彼らの特異な身体や身体性は笑いの種になる。彼らの共演者や観客たちはそのようなジョークにおいて遠慮なく笑っているように見える。身体の欠損をめぐるこうした遊戯性に満ちた態度はどのような文化的背景に起因しているのだろうか？彼らは笑いを引き起こすことでなにを成し遂げているのであろうか？そして彼らの欠損をめぐる意義は上演を通じてどのように交渉されたり作り上げられたりしているのだろうか？本研究はこれらの問いについて、2 つの事例研究より接近するものである。

本発表ではまずバリヒンドゥ教の輪廻転生の世界観において、身体的欠損は前世のカルマの現れとしてスティグマ化されているのと同時に、人間とはみなどこか欠損・欠点のある不完全な存在として概念化されていることを確認した。また、そうした人間観を反映して、一般の (いわゆる健常者による) 芸能上演においても、村人役は、身体や性格にどこか欠点があったり偏りがあったりしながらも、コミカルで親しみのある存在として演じられることを指摘した。そういった人間の不完全さの表現の一環として、しばしば健常者の役者は、身体障害を模倣する演技を行う。観客たちは、これを躊躇なく笑うが、その理由として (1) これらの村人役が身近で親しみのある人、観客自身の投影として観られていると考えられること (2) そうした障害の模倣自体が、技巧の一つとし楽しまれていることが挙げられる。

ただしこの 2 点目に関しては、実際の障害がある者達が演じるならば、成立しないことになる。

こうしたことを念頭に後半では、構音障害の役者 Nungah 氏の演じる歌舞踊劇(事例 1)、そして視覚障害者の音楽グループ Rwa Bineda の掛け合い歌およびそれにつづく「健常者」の道化役者とのやりとり(事例 2)をビデオで紹介しつつ分析した。そして彼らが自分たちの身体欠損を笑いに転換することで、成し遂げていることは何か、という問いについて以下の 3 点を指摘した。(1) 芸能に参加すること自体が、神や信者コミュニティーへの奉仕となること。特に笑いを引き起こすことができるという技能は、バリ社会で高い価値をもち、彼らがコメディを通して、社会参加のチャンネルを得ていること。(2) ユーモアの裏にメッセージを託し、発信していること。(3) 即興部分では(自己表現やメッセージの発信よりも)むしろ上演相手や観客との関係性が反映されること。その中で、障害のある役者と健常者の役者そして観客たちは、互いの距離を測ったり、さまざまな関係のとりかたを試したり、身体の特異性を味わったりする。芸能、特にコメディ劇は、笑ったり笑わなかったりする観客を巻き込みながら、そういった探求を可能にする場を提供しているのである。

続いて 2 番目の発表者の久世濃子研究員(国立科学博物館)は”**Research and Conservation of Orangutans in Borneo and Sumatran Islands**”というタイトルでインドネシア・マレーシアにおけるオランウータン研究の知見を、その環境保全への含意なども交えつつ紹介した。その概要は以下の通りである。

オランウータンは最終氷期が終わる 1 万年前頃までは、中国南部からタイ、マレー半島やジャワ島などを含む東南アジア全域に、100 万頭以上が生息していたと言われていが、現在は、ボルネオ島とスマトラ島の限られた場所にのみ生息している。それぞれの島に生息するオランウータンは、「ボルネオオランウータン(学名: *Pongo pygmaeus*)」と「スマトラオランウータン(*Pongo abelli*)」の 2 種に分類する考えが主流だった。スマトラ島の「トバ・カルデラ湖(トバ火山)」南側の個体群は、北側の個体群(スマトラオランウータン)と遺伝的にも形態的にもかなり異なっていることが判明し、新種「タパヌリオランウータン(*Pongo Tapanuliensis*)」として 2017 年に報告された。338 万年前頃にまずスマトラオランウータンがタパヌリから分岐し、67 万年前頃にタパヌリからボルネオオランウータンが誕生した、と推定されている。

オランウータンは現存する最大の樹上性動物であり、野生下では、オトナの雄は体重 75~80kg、オトナ雌では 35~40kg になる。一生の大部分を木の上で過ごし、地面に下りてくることはほとんどない。成長はとても遅く、性成熟するのは 15 歳前後、寿命は 60 歳ぐらいである。オランウータンは平均 7.5 年(6~9 年)に 1 回、1 頭のコドモしか出産せず、繁殖スピードが極端に遅い為に、一度生息数が減少すると回復に長い時間がかかる。

サバ州ダナムバレイ森林保護区では、2004 年から日本人研究者が中心になって野生オランウータンの長期調査が行われている。オランウータンは果実食者で、野生のドリアン、

マンゴーを好物にしているが、ダナムバレイではこうした野生種は、数年に1度しか実をつけない。好物の果実がない時には、イチジク属やカキ属などの栄養価の劣る果実を食べ、これらの果実もなくなると、マメ科などの若葉や樹皮も食べる。しかしスマトラ島はボルネオ島に比べると、果実が実る頻度が高く（果実欠乏期が短い）、イチジクの密度も高いので、樹皮を食べることは滅多にない。

オランウータンは20世紀の間に激減し、2016年にIUCN（国際自然保護連合）が発表した報告書によると、スマトラ島に14000頭（うち800頭がタパヌリ種）、ボルネオ島に70,000頭、あわせて8万頭ほどしか残っていない。生息地である熱帯雨林が、森林伐採や農地開発、森林火災等で減少していることや、密猟がオランウータンを絶滅の危機に追いやっている。サバ州ではインドネシア（カリマンタンやスマトラ島）に比べて密猟が少ないとされているが、2018年に射殺された雌のオランウータンの遺体がキナバタンガン川で発見されている。

そして最後に、3人目の講演者である Md. Sayed Uddin (Faculty of Humanities, Arts and Heritage, UMS) 博士は“Impacts of Socio-Demographic Factors on Utilisation of Health Care Services: Empirical Evidence from Migrant Workers in Malaysia” と題してマレーシアにおける移民と、そのヘルスケアを取り巻く問題などに関して定量的データを含む調査研究の内容を紹介した。以上の3人の講演者の発表終了後には UMS の学生や教員を中心とする参加者を含む質疑応答が熱心に行われた。

（以上、終わり。文責：床呂郁哉）